
大いなるすれ違い

いしんいしんいしん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大いなるすれ違い

【Nコード】

N5839P

【作者名】

ぶんぶんぶん

【あらすじ】

突然異世界に呼ばれた娘。

あの、みなさん期待して下さるのはありがたいのですが、何か話が違ってやしませんかね？

大いなる買い被り 1

今、私の頭の中には、どうすれば穏便にかつ間接的にかつ即時的な断りの文句を言えるだろうか、という問いが駆け回っている。

私は3人姉妹の長女であり、幼いころから下の子、そして両親に、ひいては近所の子供たちから周囲の面倒をみることを期待されており、実際にその通りに行動してきたつもりだ。

その期待に忠実にこたえられてかどうかは知るところではないが、今に至るまでわたしへのそのような不可視のプレッシャーが止まってはいないことを考えると、それなりの結果を残していたと考えてよいだろう。

けれど、誤解を招かないように言うておくと、私は決まっていよいよその役目をこなしていたわけではなかった。

自分を慕ってくれる子たちはかわいいと素直に思えたと、そんな子たちが、何らかの出来事で傷つくようなことがあってほしくはなかった。

初めて上の妹を認識した時の気持ちは、「私がこの子を守らなきゃ！」というものだったし、そうだった自分の思いと、周囲の思惑がちょうど重なったというだけにすぎないのではないかと思う。

つまりどういことが言いたいのかというと、私があるような立場にいたのは自分の意志と成り行きが原因だったということだ。

ゆえに、今私は声を大にして言いたい。

私はこの国とか、この世界とかの面倒を見きれぬほどの度量はないのですと。

大いなる買い被り 2

部屋の中には、複数の人物がいた。

室内にはほぼ何の装飾もなく、ところどころに木で造られた机やいすがあるだけである。しかし、その飾り気のなさや柔らかい木の家具が温かみを感じさせていた。

長方形の形の室内には、出入り口から最も遠いところにある頑丈な作りの椅子に座るたくましい体つきの男性がいる。そしてその右手には老境にさしかかった男性が控え、左手には年齢が読めない中性的な美貌のローブをまとった人物が杖を持ってたっている。

その3人と向かい合っているのはまだ育ち切っていないだろう体を純白の神官服に包んだ美貌の少年で、その右手は質素な服に身を包み無表情のままたずむ若い娘の左手をしっかりとつかんでいる。

そして部屋の隅には腰に剣をはいて、直立不動の体勢を維持したままの若い騎士がいる。この場にいるだれとも違うような異国風の顔立ちをした彼は、部屋の中心で少年に手をつかまれたままの娘をじっと見やっっている。

さらに天井付近では、薄緑色で向こうが透けて見える体をもった、まだ5、6歳ほどの姿の男児がふよふよと浮かんでいる。彼はどのような年代の姿も、さらには実体化した姿もとることのできる上位精霊であるが、話がいつまでも進まないことに飽いたのか、いつの間にか現在のような姿となって一人戦線離脱したのである。

大いなる買い被り 3

そう、今現在この部屋の中では話し合いが設けられているのである。たとえ始まってからの2時間、ほぼ議論が平行線で何の結論も出ていないとしても、である。

豪華な装いの、神妙な顔付きの男性は言った。

「今現在、この国の東の森には魔王が住んでおり、着々とその魔の手を付近の住民に伸ばしている。

一刻の猶予もない。申し訳ないのだが、勇者殿にはぜひ早急に、王城で討伐の準備にかかっていたきたい。」

部屋の主、いやこの部屋がある王城すべての主人でもある国王は、椅子に腰かけたまま、その瞳を部屋の中心に立つ娘に見据えた。

（魔王か。まーありきたりですよ。なんでこの国限定で襲っているかは知らないけど、確かに急務ではあるのか？）

悠里は無表情ながらも王の発言を吟味していた。

悠里のうなずきに力を得たのか、脇に控えた老人　この国の宰相らしい　は身を乗り出して、

「異世界からの客人にこのようなお願いをするのは、筋の通らないものだと承知しております。

ただ、かの魔王には剣はおろか、わが国屈指の魔術師たちも齒が立たない様子、もう貴方様におすがりするしか……。」

普段はやさしい、柔らかな表情を浮かべていたのだから顔は、今は焦りのためか憔悴しきっている。

そのためか、敬老の心をもつものならば無条件に手を差し伸べざる得ないような空気を醸し出している。

さらにローブを着た年齢不詳の人物　こちらは宮廷魔術師長の職にあるらしい　も熱心に訴えてくる。

「宰相殿のおっしゃる通りなのです。今は急遽選別された魔術師らによつて、国民への被害は何とか抑えているのですが、相手に魔術が効かない以上、それも一時しのぎでしかなく…。」
「こちらにも、繊細な作りの顔を本当につらそうにゆがめてそういうものだから、ついつい「私にできることでしたら…」などと口に出そうとした。」

その時、悠里の心の揺らぎを感じたのか、開いた口から実際にその言葉が出る前に、大きな声でさえぎるものがあった。

大いなる買い被り 4

「お三方、冗談はおやめください。

巫女様はこの世界の安寧のために、神殿の奥深くで、神に祈りをささげていただくべき存在。

心安らかに過ごせるようにできうる限りのことをするのが、この世界に生きるものすべての責務というのに……。

巫女様に何の関係もない魔王のためにその身を危険にさらすなど、大神殿の神官師長としても、一人の人間としても、許せることではありません。」

悠里の手を放そうとはせず、愛らしい顔に激情を乗せて、そう言い放ったのは、この世界に強い勢力を誇るライラ教の神官師長。よくは分からないがかなりトップに近い地位らしい である。

「そもそも、この方が大神殿の奥の泉から現れたということだけでも、女神様のご意思がどこにあるのかわかろうというものではありませんか。そのためこちらでは護衛も付けてその御身の安全を図っているというのに。」

それを、再三の呼び出しで王城まで連れ出してそのようなお話とは……。リラ王はこの世界全体のことはどうでもよいとおっしゃるのか。

「
神官は、部屋の隅に控える神殿騎士に視線を向けながら続ける。」

「あー確かに私をはじめについたのって神殿の管轄区域みたいだからなあ。

発見してくれたのもあの騎士さんだったし……。

はつきりとはだれも言わないけど、私の所有権？みたいなものは神殿が握ってるってこと？

こつちの世界にも、落し物は拾い主がもらつなんて概念があるのかもなー。)

この世界に落ちてから、衣食住すべてを神殿に世話になっている身としては、そのことも盾に取られたら何も言えなくなるだろう。

今のところ、神殿にも少年個人にも恩に着られるようなことはない。ただひたすらこちらの過ごしやすいよう気を使ってくれるので、ますます何も言えなくなつてはいるが。

王国側は、現れた場所や神殿の権威そのものを持ち出されてしまい、反論できないでいる。

そこに気の抜けた声が上がから降ってくる。

「ねー、その話まだ続くの？つていうか愛し子と呼んだのは僕らなんだから、この子は僕らのなんだよ。勝手に魔王だの女神だの理由つけないでよね。」

大いなる買い被り 5

今までの2時間にも及ぶ話し合いをすべて無に帰すような発言をされましたのは、人間たちの頭上で漂っている精霊である。

「ユーリは僕らが呼び寄せたんだよ。

この子の力は大きすぎたし、なのにユーリはコントロールをすることもできなくて、教わる相手もないままだった。

あのままでは元の世界に被害が出るところだったから、そちらの精霊から頼まれて引き受けたんだ。」

初めて声をかわした時に自分も聞かされた説明を、初耳だろう王国側の人間3人に向って繰り返す。

彼らはやはり驚いた様子だ。

「呼んだはじめはユーリも混乱してたから、負担の少ないようにって神力の強い場所に降りてもらったけど、もともとは僕らが一緒に過ごす予定だったのに。」

みんな愛し子がくるって楽しみにしてたのにさ。

どっかの神官が、他所からの干渉を受け付けないような神術をかけたもんだから、ユーリには声くらいしか届けられなかったんだ。

神殿側に説明しても返してくれようとしないうし、そのうち魔王がどーこーってリラ王国まで出てくるしで参ったよ。」

最後の台詞はもしかや私にあてたものだろうか。

少しじと目で見られたような気がする。

（えっ、この状況ってわたしのせいなの？違うよね？

確かに元の世界ではいろいろ不思議なこと起きたけど！

妹たちと歩いてたときに出くわした変質者は、何もしてないのに吹っ飛んだりとかしてたけど！)

(そもそも私がこの世界に来た途端、なんかおかしいほど持ち上げられてるんですけど。

私たぶんそんな大層な人間じゃないって！

みんな夢見すぎだよ！

この国のエリートが束になってかなわなかった魔王に小娘が立ち向かえると本当に信じてるのか、この国の人間は。)

そこで王様をみると、彼はずっとこちらを見ていたらしく、男の色気あふれる顔でじーっと何かを訴えようとしているようだ。

大いなる買い被り 6

王様はその視線をそらさないまま低い声でこんなことをのたまってくれた。

「勇者殿のお考えを聞かせては下さらないだろうか。」
一瞬何を言われたのか把握できなかった。

「陛下？」

「リラ王、どういっつもりです？」

王様の発言の意図がつかめないのは他の面々も同様らしく、側近の二人や神官の少年も怪訝そうな顔で言葉を向けていた。

ただ、頭上に浮いている上級精霊　ロアと呼んでくれと自己紹介された　だけは面白い事を聞いたとばかりに顔をにやつかせている。

行儀の悪さも相まって、とても自然界をつかさどる精霊とは思えないほどのガラの悪さだ。

そう内心つぶやいたことがばれたのか、不意にロアが私に目を向けた。

何か文句でも言われるのかと思ったのだが、その顔は5、6歳の見かけにはそぐわぬほど大人びた真面目な表情だったので、戸惑ってしまった。

「つもりも何も、文字どおりの意味だ。

われわれは確かにそれぞれ勇者殿、いやユーリ殿を必要としているし、協力してもらえるのなら願ってもいないことだ。

けれどそれはあくまでこちら側の事情にすぎないのだろうか？

ユーリ殿にはユーリ殿の事情があつてこの世界に来られた異世界からの客人だ。こちらの人間が、本来何かを彼女に強いたりできる立

場ではないと思っただけだ。」

王様は周囲の反応に何ら動じることなく、淡々と考えを述べていく。

（へえ、王様なのに謙虚だね。てっきり無理やりにも言うこと聞かせようとする人かと思ってた。）

イメージをいい意味で裏切る発言に、私の中で王様の好感度がグーッと上昇する。

実は、今日王城に来るまで、まるでリラ国は残酷非道の輩の巣窟のようなものだと感じていたのだ。

自分でもそんな先入観を抱いていたとは気付かなかったがおそらくは……

「なんてことをおっしゃるのか。

神のご意思を疑うとおっしゃるのですか？

巫女様はライラ神が、この世界を思っ下されたお方。

その祈りを神にささげていただくことにより世界の安寧を図るとい
う、神がくだされた定めは、人が左右できるものではないでしょう。

「
このように神さま至上主義の神官たちが近くにいたからかもしれな
い。」

（いやー、神官がたの期待はありがたいんですけどね？

やらされることも神殿に引きこもって祈ってるとかいうのだから、
別に身体的負担はさほどないんだけどね？

そこまで一人の人間に神威だとか押しつけられるのはちょっと……）

こんなことを言うこの神官師長でも、私が接した神殿の人々の中
では話がわかるほうに分類されるのだから、なかなか難しいものだ。

神官の発言に対して、王様は思いがけないことを言われた、とても言うように反論する。

その表情も、まるでそんなつもりはありません、とばかりな驚き顔だ。

「誤解しないでいただきたい。

私は決して神殿の考えを否定しているわけではないのだ。

ただ、ユーリ殿が意思を持った一個の人間であることは明らかです。そして、神殿の言うような崇高な方であるならば、卑小な存在であるわれわれただびとが、彼女に何らかの行動を強いることは許されないでしょう。」

「そう考えると、われわれの行動は、ユーリ殿の好意にすぎるしかないのですか?。」

だからこそ、ユーリ殿の真意に沿うことこそが、結局は神のご意思にかなうことでもあり、彼女にとって不愉快な言動を避けるためにも、現時点でのユーリ殿の御考えを知っておきたいと思っただまですぎません。」

そこまで一気に言いきると、王様は再びわたしに向き直る。

おそらくわたしの「御考え」とやらを求めているのだろうが、わたしは先ほどの台詞の意味を咀嚼していたので即座に答えることはできなかつた。

(うーん、言葉は取り繕ってたけど、あれって神殿へのけん制でもあるよね。

神様の直接の配下なら、神殿だってわたしに何か強制するのは許されないだろ、お前もこっちと同じ立場なんだよ、ってところか。)(それに、神の意志うんぬんを持ち出して、最終決定はわたしの心ひとつだって言いたいのかな。

謙虚って思ったけどやっぱり政治家なんだなー、言葉を取り繕うのがうまい。

もし本音で言ってる天然ならそれはそれでこわいけど。)

うまく自分たち神殿の主張を利用された神官のほうを見やると、私と同様に王様の言葉の意味を読み取ったのか、一瞬悔しそうな顔をした。すぐに私の視線に気づいて消してしまっただが。

さすが、王国のトップとの会談に出るほどの少年だ。

まだ経験もさほどないだろうになかなかの自制心だと感心した。

そこまで考えて、では王の側近たちはどんな様子だろうかと見やってみてみた。

大いなる買い被り 8

宰相といふかなりな高位にしているだろう男性は、こちらを相変わらず真摯な瞳で見ている。

「ユーリ殿…、どうかお願い申し上げる。」

先ほどからの話しぶりにも、国のためにこちらを説得しようという姿勢は感じられた。

そして、年齢の割には身のこなしも機敏で、しゃんと伸びた背筋にも老いを感じさせるものもないけれど、そのたたずまいは落ち着いた様子だった。

そんな人が、自分のような若年者がすぎるように見られては、落ち着かないのはしょうがないだろう。

それに、神殿で、安全のためにと保護（軟禁ともいえるか）されていた私を訪れ、手紙をよこし、私を気遣い、外の様子を知らせてくれたのはこの人でもあるのだ。もちろん向こうには向こうの思惑があったのだろうが、日々閉じこもらざる得なかった私にはかなりありがたかった。

そんな人物が、私のような自分の半分の年齢にもなっていないような小娘に頼っていることを考えると、やはりここは協力すべきか……

そんなためらいを私の表情から読み取ったらしい。

横から後押しするように、魔術師が言う。

「わたくしからもお願いいたします。

部下からの情報では、相手は直接傷を与えるような魔術は一貫して使っていないと聞いております。勇者様に危害の及ぶ可能性は低いというのが我々の見解でして、それもあつて今回お願いに参った次第でもあるのです。

もちろん、いらっしやつた際には総力を尽くして安全をおはかりします。」

こちらは淡々と私を納得させようという様子だ。

魔王とやらが攻撃魔術を使っていないということは初耳であった。

それだけでは私に危険がないと言い切ることはできない気もしたが、そもそも私にこちらの魔術は効かない。

王宮側も一種神殿からの借り物となる私に怪我をさせたくはないだろうから、威信をかけても出来る限りのことはするだろう。

空中でいまだににやけた顔をしつつも、私に向かって意味ありげな眼を向ける子供からは、別に自分の好きなようにやれと初めから言われている。

それに、この国に滞在する以上、どうせ耳に入らざるを得ないことでもある。

「私に何ができるかはわかりません。

はっきりした保障は出来かねますが、何か力になれることがあるのなら、

この国に生活するものとして手伝いたいと思います。」

このくらいは今の時点で言ってもかまわないだろう。
いまだ自分の手を握りしめている神官姿の少年をみると、心底納得
したわけではなさそうだが、反論はしないでくれた。

王国側の人間はそれを聞いて安心したような顔になる。
そこまで喜ばれてしまうとは逆に申し訳ない。

「ああ、そう言ってくれるとありがたい。王国を代表して感謝する。
これでやっ」と
王様も整った顔を少し緩めてそんなことをいうものだから、ついつい反射的に否定する。

「いえ、私は……」
私の力がなぜか必要以上に高く見積もられている。
なんとか早い段階で修正したいものだ。
きつとあとで痛い目を見る気がする（おもに私が）。

そんな私の声にかぶせるような声がいくつか。
「何をおっしゃいますか。あなたがいて下さるだけで、天の助けを得られたようなものでしょう。」
「その通りです。私はあなたが魔王に立ち向かうとは考えるだけで恐ろしいとは思いますが、神の御加護のあるあなたがいるのならば、討伐も近いでしょう。」

ああ、言わせてももらえない。
私に何ができるかもわからないのに、そこまで期待されるのはつらい。

後でがっかりされるのは、一度持ち上げられたものにとってかなりの落差を感じるからだろう。

その時に傷つくのは私なのだが、悪いのも周りの期待にこたえられなかった私なのだろうな。

始まる間からかなり暗い気持ちになってしまったが、部屋にいる人間は反比例してテンションが上がっているようなのは気のせいではないのだろう。

「皆様、ユーリさまは少々お疲れの様子。討伐の話を進めるにしても、一度場を移されてはいかがでしょう。」
そんな声が聞こえた時、ほぼ全員が彼のほうを見た。

大いなる買い被り 10 (前書き)

そういったのは今まで終始無言を貫いていた騎士のサーリだ。

私がこの前教えてもらったところによるおと、『場を移す』という表現は単に場所を移動しようという意味だけでなく、お茶や軽食をつまめるようなところに移動しようという意味もあるらしい。神殿では頻繁に使われていた語である。

その言葉はかなりありがたかった。

初めにこの部屋に来た時に配られた飲み物ももうずいぶん前に飲み干してしまっただし、長時間の話し合いでも普段ならば昼食だろう時間も大幅にすぎている。

それに加えて、話し合いが始まったばかりのころ、熱が入りすぎたあまり王様以外の人が椅子から立ち上がったてしまい（私は入室した時から、少年に手を掴まれたままだったのでいたしかたなくだったが）、その後も何となく自分だけ座るわけにもいかないかと思っただけで、そのままだったので、足が疲れてきていたのだ。

サーリは体を鍛えているから、彼にとってはこれくらいはもちろんなんてこともないのだろう。

きつと、毎日一緒に過ごしたせいで、私の悲惨に思えるほどの体力の無さを身をもって知っている彼が、助け船を出してくれたのだら

うと思った。

直接的に何かを口には出すのは品がないとかという理由で生まれた言葉らしいが、王宮でも日常会話としてあるのだろうか？

回りくどいし、いろいろなニュアンスを含んでるから、私もここに来た初めは「つまりは移動したいの？部屋に帰れればいいの？それともお茶の誘いなの？」と頭をひねらせた言葉だ。

「ああ、確かにかなりの時間がたっているな。ユーリどのたちには申し訳ないことをした。

良ければ一度体を休めてもらってから、昼食をとりつつ今後の予定を話せないだろうか？」

そのふくんだニュアンスを正確に読み取ったのだろう王様が、そんなことを言ってくれる。

私はもちろんかまわないが、引率役と思われる少年はどうだろうか？

現在の私は神殿の外では誰かしら神殿のものがいないと何も一人ではできない。

身元引き受け人のような立場に神殿がある。

護衛役のサーリはあくまで私の身の安全のためにいる人間だし、精霊はそもそも人間でもなければ一般人には見えない存在だ。とうてい私の行動に責任を負えるものではない。

少年は私を見ると納得したようにうなずいた。

彼は、今日は一日中私に付き添う予定と聞いていたし、思いがけず話が長引いたため、さすがに私に休息が必要だとも思ったのだろう。

今も自分が手を握っていたせいで、私がちつぱなしたことに気付いて心なしかあわてて私を椅子に座らせようとする。

それをやんわりと断りつつ、どうせなら握っていた手にもっと早く気付いてほしかったと思う。

私は決して彼らが思うほど病弱だったりはいらないが、座り心地のよさそうな椅子があつてかつ必要もないのに立ち続けるような趣味はない。

しかしたいていの場合、神殿の人たちは本当にすぎるくらいに私の身を案じている。

初めの日に私がつつかり意識不明になったのがいけないのだろうか。あれは無理にこちらの世界に来た副作用だからとはそのあと説明されたから、平気かと思っていたが。

今回の訪問も、再三王宮からの登城の催促があつたにもかかわらず、常に断っていたため、ついには勅命での公式な文書が下されたため

しづしづ許可を出したらしい。

それに向こうが神殿に来て私と接することもかなり制限があった。宰相の訪問は頻度はともかく一回の時間が短いものしか許されなかった。そのため、交わした言葉は手紙によるものが多かった。

まあ、そんな神官からの無言の許可を得たので、私は王様に向かって言う。

「そうしていただけると助かります。

ただ、一刻を争うことだとおっしゃってましたし、皆さんの執務もあるでしょうから、そちらの都合のよい時間で構いません。」

「…そうか、しかしひとまず別室で休まれるとよいだろう。今案内させよう。」

先ほど瞬間的にゆるんだ口元を再び引き締めていた王様は、私の言葉を聞いて眉をひそめたように見えた。

脇に控えていた魔術師に向かって何事か言ったあと、背後にある何かパイプのようなものをいじったとたん、私たちが入室したのとは違う扉から侍従服を着た男性が登場する。

「こちらを、青磁の間までお連れするように。」

そう指示をしたあと、今度は振り向いて今度は私たちに言う。

「その部屋に軽食も用意させる。そちらでまた今後について話したい。」

…もしかすると私は遅れるかもしれないが、どうぞくつろいでいてほしい。」

言葉が終ると、その侍従はこちらに向かって無言で恭しく礼をする。

そうして、私は再び少年に手をひかれ、後ろにサーリを従えながら、部屋を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5839p/>

大いなるすれ違い

2010年12月31日01時21分発行